

社会科

事象にこだわり，解釈を語り合う社会科学学習

1 これまでの研究の経緯

これまで，本校社会科部では，社会科における確かなる知の中核として「合理的意志決定力」をおき，研究を進めてきた。合理的意志決定力とは，図1に示すように，社会認識と価値判断力が関係し合いながら高まっていく総合的な力と考えている。

このような合理的意志決定力が高まっていく状況をつくるためには，「社会とのかかわり」「授業における相互作用としてののかかわり」「自己とのかかわり」を生み出すことが必要だと考えた。そして，昨年度，これらののかかわりを生み出すための手だてとそこから見えてくる社会科学学習における「教えること」を，表1のように提案した。

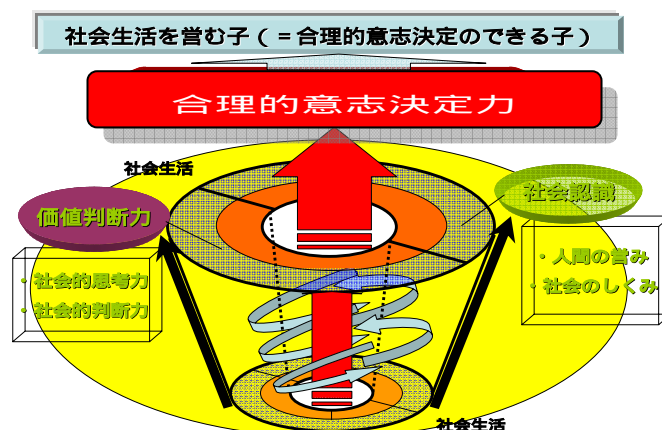


図1 合理的意志決定力の構造図

表1 三つののかかわりを生み出す手だてと明らかになった「教えること」

	「社会とのかかわり」	「授業における相互作用としてののかかわり」	「自己とのかかわり」
かかわりを生む手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ価値を見いだすことのできる社会的事象を用意する。 ・社会的事象に対する子どもの意味づけや価値づけを促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元にテーマ性をもたせ，自分の考えを表現できる場を設定する。 ・事実判断場面を充実させる。 ・価値判断場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ツールミン図」「イメージマップ」「振り返りカード」「座席表」などの評価道具を効果的に活用する。
見えてきた「教えること」	<ul style="list-style-type: none"> ・社会と自分とのつながりを見いだそうとすること ・社会的事象がもつ意味や価値を考えようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的事象に対する自分なりの解釈をもつこと ・事象に対する解釈を吟味し，合理性を高めていこうとすること 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の社会の見方や考え方をメタ認知し，活用すること ・資料活用などの学び方を見だし，活用すること

表1にもあるように，合理的意志決定力を育てるための「教えること」として，「社会と自分との関係性を見直し」「自分なりの解釈に対する他者や自己との吟味」「社会に対する見方・考え方や学び方のメタ認知と意識的な活用」などを示した。また，これらの「教えること」から，新たな子どもの「学ぶこと」として「社会科固有のものの見方・考え方」「知識を問い直そうとする態度」が見えてきた。

本年度は，これらの「教えること」「学ぶこと」を関係づけながら，これらが共鳴している状況（すなわち，社会科における「真の学び」が創造されている状況）とその状況が生み出される要因（「真の学び」を

創造するための文化)に注目していく。その際、昨年度に見いだされた「教えること」「学ぶこと」を子どもたちの姿にあてはめ、「事象にこだわり、解釈を語り合う」という状況を想定した。

そこで、以下に「事象にこだわり、解釈を語り合う」ことについて示しながら、そのような子どもたちの姿が表われる要因について考察していくことで、社会科における「真の学び」創造の要件を示していきたいと考える。

2 事象にこだわる

(1) 事象にこだわるとは

「事象にこだわる」とは、昨年度の研究から見いだした「教えること」における「社会と自分との関係性を見直し」や、「学ぶこと」における「知識を問い直そうとする態度」に対応しているものである。

例えば、「リサイクルは社会にとってよいことだ」と絶対的に思いこむのではなく、「本当によいことなのか」「短所はないのか」「もしリサイクルがなければどうなるのか」などを考えながら、リサイクルのよさを常に問い直して行こうとする子どもの姿を示している。

つまり、「事象にこだわる」とは、多面的に社会的事象の意味や価値をとらえようとする姿や、自分たちが見いだした社会的事象の意味や価値を問い直していこうとする姿のことを表している。

そして、子どもに事象にこだわらせるためには、単元や授業構想の段階で、「社会とのかかわり」「授業における相互作用としてののかかわり」を生む教師の手だてを考慮することが必要である。すなわち、「自分の考えを言語化し、表現する場を設定した単元及び授業構成」「新しい社会のテーマや社会論争問題とのつながりを意識できるような社会的事象の用意」などである。

ただ、このような単元構成や授業構成の工夫だけでは、事象にこだわる子どもを育てることは難しい。なぜなら、事象にこだわる子どもを育てるためには、自分なりの考えをもつための方法を意識させ、それを身につけていくことが必要だと考えるからである。そこで、次に、自分なりの考えをもつための方法とは何かということ考察していくこととする。

(2) 自分なりの考えをもつための方法

自分なりの考えは、独りよがりの考えではいけない。豊かな社会認識に支えられた事実判断、推理、価値判断になるようにしなければならない。そのためには、子どもの社会の見方・考え方に注目し、単元を越えて継続的に育てていく必要がある。ただ、大まかに「社会の見方・考え方を育てる」というのではなく、具体的にどのような見方・考え方を身につけさせるのかをはっきりとさせておかなければ、単元構成や授業構成の際に生かすことができない。そして、このことが、昨年度に「学ぶこと」として示した「社会科固有のものの見方や考え方」の具体を示すことにもつながると考える。

そこで、これまでの実践から、社会の見方・考え方にあたるものを抽出し、整理した。表2に示しているのは、実践の中で見いだしてきた社会の見方・考え方の内容と典型例、関連する思考である。もちろん、

表2 社会の見方・考え方の内容と典型例，関連する思考

	内 容		典 型 例	関連する思考
見 方	ありのままに見る		事象そのものから特徴や様子を見る	事実判断
	比較して見る	他事象と比べる(空間軸)	他事象と比べて特徴や様子を見る	
		変化を見る(時間軸)	歴史的な変化から特徴や様子を見る	
	他事象と関連づけて，総合的に見る		より広い視野から，事象の特徴や様子を見る	
考え方	原因と結果の関連を考える(類推的)		「～だから...だと考えられる」	推理
	複数の理由から自分の考えをつくる(多面的)		「...なのは,AとBとCだからだ。」	推理，価値判断
	仮定して考える(仮定的)		「もし～がなければ...だと考えられる」	推理，価値判断
	異なる立場も考慮して考える(反証的)		「違う立場から見ると，...だと考えられる」	推理，価値判断

表2が社会の見方・考え方を全て網羅しているとは考えていない。今後，どのような社会の見方・考え方があるのかをさらに明らかにして行かなければならない。しかし，これらの見方・考え方を明確にし，それらを活用する場を四年間の小学校社会科カリキュラムの中に位置づけていくことは，自分なりの考えをもたせるための方法を育てるためには有効なことだと考える。その際，子どもの実態や認識内容との関連を考慮することも必要である。

(3) 自分なりの考えをもつための方法を高める

上記のような自分なりの考えをもつための方法を高めるためには，次の二点が必要になってくると考えられる。すなわち，「社会の見方・考え方をメタ認知させ，意識的に活用させること」「教師による意味づけ，価値づけ」である。

「社会の見方・考え方をメタ認知させ，意識的に活用させること」は，表1の自己とのかかわりに対応している。具体的には，トゥールミン図における主張と理由づけの記述，振り返りカードの記述などを見て，表2に示したような社会の見方・考え方があるかどうかを客観的にとらえさせるのである。ただ，子どもだけでこのような社会の見方・考え方を見きわめていくことは難しい。

そこで重要になるのが，「教師の意味づけ，価値づけ」である。振り返りカードやトゥールミン図への朱書きをしたり，交流後に学級に対して社会の見方・考え方の意味づけや価値づけを行ったりすることで，子どもの社会の見方・考え方に対するメタ認知を促すことになる。また，そのことを，単元を越えて継続的に行うことで，社会の見方・考え方の単元を越えての転移をうながし，自分の考えをもつための方法として身につけることにつながっていくと考える。

以上のように，「社会の見方・考え方をメタ認知させ，意識的に活用させること」と「教師による意味づけ，価値づけ」を関連させながら，社会の見方・考え方を継続的に育てていくことが重要だと考える。

3 解釈を語り合う

(1) 解釈を語り合うこととその意義

ここで言う解釈とは，子どもの事実判断や推理，価値判断とその理由づけのことである。言い換えれば，

子どもの社会的事象に対する意味づけや価値づけのことだと言える。このような解釈を語り合うことの意義については、次の二点を考えている。

一つ目の意義としては、解釈を語らせることで習得した認識の活用を促すことである。ここで言う習得とは、基礎的な知識や技能を身につけることである。解釈を他者に語るためには、習得してきたことの比較、関連、統合などを行いながら、自分の考えを言語化しなければならない。この比較、関連、統合などの過程が活用である。そして、習得した認識を活用する過程の中で、子どもが自分と社会的事象とのつながりを実感するものとする。つまり、認識の活用を促すことで、実感的な理解を生み出そうとしたのである。

二つ目の意義としては、学級集団での事実判断や推理、価値判断を行うことで、認識の育成だけではなく民主的態度の育成にもつながることである。つまり、解釈を吟味し合う過程そのものが、合理的意志決定力を育むことになるのである。そして、このことは、学習指導要領にある「公民的資質の基礎」を養うことにもなるだろう。

ここまでは、解釈を語り合うことの有効性について検討してきた。次に、このような解釈を語り合う場面をどのように設定し、コーディネートしていくのかということについて説明していく。

（２）解釈を語り合う場面をコーディネートする

解釈を語り合いたいと思うことのできる場の設定

解釈を語り合うためには、子ども自身が解釈をもち、語り合いたいと思うことのできる場の設定が必要になってくる。このことについては、これまでも「授業における相互作用としてのかわり」を生み出すために、「単元にテーマ性をもたせ、自分の考えを表現できる場を設定する」「事実判断場面を充実させる」「価値判断場面を設定する」ことを説明している（表１）。

その際に留意することは、社会的事象を追求することによって社会が見えてくることを実感できるようにすることであろう。例えば、６年生の国際単元において、フェアトレードを題材に学習を進める際、フェアトレードの仕組みそのものを学習するだけではなく、「なぜフェアトレードが行われるようになったのか」「フェアトレードの効果はどうか」などを考えることで、南北問題や貿易不均衡の問題にふれることができる。こういった実感を得た子どもたちは、「社会科を学ぶことが楽しい」「自分の考えを出し合いながら認識を高めていくことは必要だ」という感覚をもつことができると考える。

解釈を語り合う場面をコーディネートする

学習場面においては、子どもの解釈を「うながす」「つなぐ」「もどす」ことが具体的な手立てとなる。「うながす」とは、その子なりの見方や考え方を全員に表出するための手立てである。例えば、ツールミン図に自分の主張と理由づけをまとめさせ、それを発言させるようにすることが挙げられる。ただし、この段階では、「事実」と子どもの「考え」が渾然一体となって子どもから表現されることが多い。

そこで、「子どもの発言を教師が「つなぐ」ことが必要になる。「つなぐ」とは、子どもの語った内容がどのような解釈に基づいているのかを子ども同士が共有できるように、教師が補足説明したりその子

なりの事象のとらえ方を説明したりすることだと考えている。その際、子どもが語った内容に対して「事実」と「考え」を整理していくことが教師に求められる。子どもから出された「事実」はその後の話し合いと根拠とすることができる。また、「考え」については本当にそうなのかを吟味しなければならない。これらを、板書を用いたり発言を整理したりすることで、子どもの発言を「つなぐ」ことが必要である。

また、子どもから出された解釈内容が本当にそうなのかを問い直す「もどす」ことが、コーディネートの手だてとして必要になる。例えば、子どもたちの発言が一通り出された後に、板書を見ながらおかしなところや疑問に思うところがないかを問い直させるようにする。そのことで、表2にある社会の見方・考え方を育てることにつながる。また、より多面的な子どもの考えを引き出すこともできる。

このように、解釈を語り合う場面をコーディネートしていきながら、子どもの考えの合理性を高めていくプロセスを経験させることで、合理的意志決定力を育んでいきたいと考える。

4 「事象にこだわり、解釈を語り合う」ための教室文化形成

これまでに明らかになった「教えること」と「学ぶこと」を関連づけながら、社会科における「真の学び」創造の要件を探ってきた。具体的には、「自分なりの考えをもたせる」「自分なりの考えをもつ方法をも高める」「解釈を語り合う場面をコーディネートし、合理性を高めるプロセスを経験させる」などである。

ただ、これらの要件を背後から支えている教室文化についても考慮していく必要があるだろう。教室文化には、「その集団でよいとされている価値観」「話し合いの暗黙のルール」などがある。これらに注目し、これらに対して積極的に教師が働きかけることで、「事象にこだわり、解釈を語り合う」という状況を生み出しやすくなると考える。

具体的には、例えば次のような教室文化を形成することが考えられる。

- ・話し合うことは、自分たちの考えをよりよいものにしていくことにつながる。
- ・自分の考えをもつこと、それを友だちと伝え合うことが学習の始まりである。
- ・様々な立場の人のことを考慮すると、よりよい考えを導き出すことができる。
- ・自分の考えの理由づけは、複数あるほうが説得力を増す。
- ・他者の意見を自分の意見と比べたり、つなげて考えたりすることでよりよい意見をつくることができる。
- ・当たり前だと思っていることも、疑ってみることが大切である。

このような教室文化で示されていることは、社会科学学習における直接の指導内容ではない。ただ、「事象にこだわり、解釈を語り合う」ためには、必要なことである。これらは、学習の中での成功体験を積み重ねることや学習の中で教師が意味づけたり価値づけたりすることで形成されるものだと考える。従って、このような教室文化形成についても継続的に取り組んでいく必要があると考える。

(高山 宗寛, 小寺 研)

【参考文献】

- 岩田一彦(2007)「社会科における思考力を育てる」, 人間教育研究会編『教育フォーラム 39 思考力を育てる』pp40-50: 金子書房
佐藤公治(1999)『対話の中の学びと成長』: 金子書房
J.V.ワーチ(2002)『行為としての心』: 北大路書房